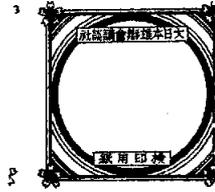


有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六二〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番

(本製地海天)

丹波與作待夜のこむろぶし

解題

寶永五年初めて大阪の竹本座に上演された。(「外題年鑑」には「前、源氏十二段、寶永四年六月二十四日。切、關小まん、丹波與作待夜小童年春の上演か」の文が引用してある。又本曲中の「與作小まん、夢路の駒」の文中に、「契りせめしは一昨々、年枝參宮の道連れに」とある。枝參宮の最も流行したものは寶永二・三年である。又本曲を少し改め、「五びす講結御神」と題して、寶永五年に京都の夷屋座で顔見世狂言に上演してゐる。これ等に據つて考へれば、本曲の初上演は寶永五年である)。作者は近松門左衛門(時五十六歳)である。

本曲は三卷に分れてゐる。就中上之卷の、滋野井・三吉の母子が名乗もできず別れる場面は、最も能く人の知る所である。

出處

「諸國盆踊唱歌」(寛文頃の)但馬の部に、「與作思へば照る日も曇る、關の小萬が涙の雨か」と見え、「與作丹波の馬追なれど、今はお江戸の刀さし」とある。又「松の落葉」(元禄十一年刊)卷四、古來中興當流踊歌の部、與作踊の歌に、「與作丹波の仕合せよしの踏み馬御免、あづま入馬方なれど、今はお江戸の刀さしちや、しやんとさせ與作云々」とある。近松はこれ等の流行歌から構想して、これ等の流行歌を引用した。そして從來の與作に關する歌舞伎狂言を参考して、この名曲を仕組んだものである。

影響

正徳二年三月竹本座に再演した時に、「丹波與作」と改題した。享保十七年六月竹本座に更に上演した時に、「伊達染手綱」と改題し、道行の題を「道行戀路の月毛馬」と改めた。寶曆元年二月竹本座にまた上演した時は、「戀女房染分手綱」と改題して、内容にも大改修を加へた。其の第十段目は、近松の原作「滋野井子別れ」(本曲上之)を其の儘用ひてゐる。

「伽羅先代萩」(天明五年正月江戸結城座上演)第六・御殿で、政岡と其の子千松とが若君に苦忠を盡す趣向は、この「滋野井子別れ」から暗示を得たものであらう。

他流の淨瑠璃では、一中節の「與作小まん、夢路の駒」がある。これから長唄の名曲「與作」も出來た。又豊後節の「丹波與作、夢路駒」もあり、宮園節の「三吉うれひの段」もある。

歌舞伎では本曲より以前、延寶五年十一月京都四條北側芝居の顔見世狂言で、元祖嵐三右衛門が「丹波與作」を演じて、籠ぬけのやつしが大當りであつたといふ。元祿三年京都村山平右衛門座で「丹波與作手綱帶」(富永平)を演じた。寶永五年には近松の本曲の筋を少し變へ、「るびす講結御神」と題して、京都夷屋松大夫座の顔見世狂言に上演した。なほ書替物では、寛保二年十一月大阪大西の芝居中村十藏座の顔見世狂言に「伊達與作龜山通」、寛政五年四月大阪中座に上演した「東海道戀關札」、寛政七年十一月京都四條南側芝居に上演した「新改版道中双六」、文化二年八月江戸市村座に上演した「小室節錦江戸入」(並木五)等がある。

上之卷 (由留木家の邸宅。道中)

登場人物の主な者

本田彌三左衛門(入間家の奥家老) 調 の 姫(由留木家の息女) 滋野井(調の姫のお乳の人)
 自然生の三吉(本名與之介。伊達與作・滋) 若 菜(由留木家の仲居)
 宰 領 侍・侍女・行列の者・お伽小姓・馬方・駕籠昇等大勢

梗概

丹波の一城主由留木家の息女調の姫は、江戸の高家入間家の養子分として興入する事となり、入間家からは奥家老本田彌三左衛門以下數多の侍や侍女等が、姫君の御迎に來た。そして御迎の供乗物四百八十挺、行列の者も勢揃ひし、三十駄の馬方の小歌も出來て、巳の上刻(午前九時頃)には花やかな出立ちといふ事になつた。所がその間際になり、姫君は俄かに機嫌をそこね、「江戸へは往かぬ」とむつがり出したので、姫君の側にあり合ふ者ども持てあぐむ。滋野井は姫君を諭しつ、威しつ、威しつ、威しつしても、

丹波與作侍夜のこむるぶし

姫君「何の東が好い所。腰元等が歌ふを聞けや。さあ皆爰へ出ていつもの歌を歌へ」。姫君の遊びのお相手となる十三歳な小姓等が、立出でて手を揃へ、「山も見えざる假初に江戸三界へ往かんして、いつ戻らんす事ぢややら、殺して置いて往かんせの、放ちば遣らじと泣きければ」と歌ふを、滋野井これを制止し、「誰に習つてそんな派手な歌を、姫君様に教へたか」と叱る。本田「申しお姫様、あれは人の戯れ言。お江戸の淺草・上野の花盛りは、京よりも美しうござりまする。また堺町。木挽町では、芝居太鼓の音がてんつくくと囃し立て、辨慶や金平が切合ひを見せませう。海道の景色も面白く、日本一の富士山も見えまする。さあお興にお召し遊ばせ」といふ。調の姫の心は、殺して往かんせの歌で江戸を嫌へるに、更に切合ひを見せると聞いては、益々江戸を嫌ひ泣いて動かす。本田も滋野井も當惑にくれる。

折から仲店の若菜が門外から駈入り、「なうお乳の人様、面白い事がござりまする。十ばかりな馬子が、道中雙六とて東海道の繪をひろげ、妙な遊びをしてるまする。姫君様の御機嫌直しに御目に懸けなされませ」といふ。滋野井「オ、能う氣が附いた。馬子でも子供は大事な。其の道中雙六を持つて来いと呼んでござれ」。若菜「承知しました」とて走り出で、やがて捌髪で片肌脱いだ三吉を連れて戻る。三吉は無作法に縁先に上げ足して無愛想に、「何の用でお呼びになつた。傍輩等と道中雙六して一儲けしようと思つたにつまらない。さつさと乗らつしやれ、馬遣りませう」といふ。滋野井「扱利口な兒ぢやな。幾つになるか、名は何といふ」。三吉「十一になります。五つの時から馬を追うて、一生若衆鬘を結うた事なく、生れながらの兒分ぢや。それで自然生の三吉といひまする」。滋野井「さても好い名ぢや。聞けば道中雙六を持つてゐるけな、腰元どもと打つて見や。姫君様も御一處に遊ばせ。さあ三吉も近く寄れ」。三吉「あい」と答へて進み出で、短い煙管を口に銜へて煙を吹かしながら、道中雙六の繪を取り出し、聲面白う拍子取りながら骰子を振る。調の姫等もこれに打交り、一座は馬子の操縦に興じて餘念もない。

〔道中雙六〕「これく御覽せ打たしやんせ。これこそ五十三次を居ながら歩む膝栗毛馬とて、南無諸佛分身の一字づつを、六角の各面に彫分けた骰子を轉ばし、京都を振出しに海道宿々の名所名物を唄ひつつ、骰子の目に従つて進む。一座楽しい旅心に

浮立つ折から、調の姫が轉ばした骰子を見た三吉は、「まづ先駆のお姫様、一番勝ちに勝色の花のお江戸にお著になる」と唄へば、皆歡聲を上げる。調の姫は喜んで笑ひ崩れる。

調の姫「斯う面白い東とは知らなんだ。早う往かう」と勇み立つたので、お側の衆も悦び、「そりや芽出度い。行列揃へよ」と立騒ぐ。お乳の人「そんなら姫君様、ま一度大殿様お袋様に首途のお杯をなされませ。馬子よお蔭になつた。お禮もいふ褒美もやる。其處に待つてゐよ」とて、姫君の供して奥に入る。

馬子は珍しげに金襖の間を覗き廻り、備後表の疊の上をうろつき、「この座敷はきつう滑つて歩かれぬ。これよりも此方の内の席の方が結構でござる」と獨言する。やがてお乳の人は文匣の蓋に大きな檀紙を敷き、其の上に種々な菓子盛つて持ち出で、「これ三吉、褒美に御前様のお菓子を遣る、有難う頂戴せよ。お錢三筋これも遣る、買ひたい物を買へよ。其方は通しぢやけな。道すがらも用があつたら、お乳の人の滋野井に逢はうと言へ。見れば見る程好い子ぢやに、馬方させる親はよくくの事であらう」と、懇ろに語る。

三吉は頭を傾けて聽澄し、「すれば由留木殿に官仕するお乳の人の滋野井様とは貴女の事か。そんなら私が母様」と抱き附く。滋野井「ア、けしからぬ。馬方の子は持たぬぞえ」ともぎ放せば、三吉は首を振つてむしやぶり附き、縋り附き、「何の嘘を申しませう。父はこの御家中で番頭を勤めた伊達の與作と申します。私は貴女から産れた與之介でござりまする。父様は殿様のお氣に違つて國をお出なされた。其の時は私が三つの年で、母様のお顔もしかと覚えませぬ。それから香掛の姨に養はれました。姥の話には「母様は父様と別れて殿様に御奉公されてゐます。其方を育てて父様に逢はせたいと思つても致し方ありません。母様の縫はれた其方の懐の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋野井様というて尋ねなされよ」と、教へてくれました。其の姥は私が五つの時に久しう痰を煩ひ、鳥羽の祭に往て餅が咽に詰つて死にました。其の後は在所の衆のお世話になつて馬を追ひ習ひ、今は石部の馬賃の内に奉公してゐます。この守袋を見て下され。何の嘘を申しませう。父様を尋ね出し、母様と私と三人

一處に暮して下され。望はこれより外に何にもありません。私は杵も打ちます、この草鞋も作りました。晝は馬を追ひ、夜は杵打ち草鞋も作つて、父様母様を養ひませう。どうぞ父様と共に居て下され拜みます」と、泣いて手を合はせ母に抱附いた。母ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子與之介の面影あり／＼として、守袋にも覺えがある。抱締めたう氣は急けども、馬子我が子とあつては、養ひ君の疵になると思ひ直し、僞つて叱らうか、イヤ可愛さうにさうもなるまい。まあ人の見ぬ中ちよつと抱きたい、ア、どうせうと、心は千々に碎けて咽び入つた。思へば我が子ながらも利口な者、僞つては彼も察して蔑むであらう。譯を説き合點させて歸さうものと、涙を拭ひ氣を鎮めて、與之介の兩手を握り、「大きいなつたなう。どうして侍らしう育つてくれなんだか。満足に生んでやつたに、この黒髪も剃下け、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ」と悲しみながら、「其方を生んだは私なれども、今では子でも母でもない。其の譯を能う聞入れて合點しや。父様の若い時は奏者役番頭に立身されて、千三百石のお扶持を戴き、私とは互に思ひ思はれる仲となつて其方を生んだ。其の後父様は度重なる不埒の爲に殿様のお氣に違ひ、奉公を差止めお扶持を召上げられて侍が廢つた。其の時に私も父様と共に退けばそれまでぢやが、それでは姫君様がお乳離れになつてお苦しみをかける。父様もこれを歎いて、『お前は残つて厚恩にあづかつた御家の御恩を報じてくれよ』と申された。それで夫婦の義理を忠義に代へて、飽かぬ別れをしたわいの。幼うても與作の男の子というては、御勳氣の末の者で氣遣ひな。早う御門から外へ出よ』と諭しつつも、我が夫も子も斯くも落ちぶれたかと、我が身の因果を思つて物悲しい涙にくれる。三吉は聞分けある程なほ泣入り、「悲しい話を聞きました。なれどもいつも姨が話に、『姫君様と私とは乳兄弟であるから、母様に逢つたら父様も出世なされる』と申しました。どうぞお上に申し上げて下されませ』。滋野井「ア、ア、物體ない、其の乳兄弟言はぬ事。姫君様は東へ御養子嫁御となられてお下りなされる際に、何が妨げにならうやら殊に慎まねばならぬ。ひそく言うてゐては人も見咎める。早う出てくれよ。三吉「母様餘り遠慮が過ぎます。まづ言うて見て下され。滋野井「まだ言ひ居るか、聞分けのない。夫や我が子の事に如在があるものか」と制する内に、奥から「お乳の人は何處にござる。御前様がお呼

びになる」と呼ばはる。滋野井「ヤア人が呼びに来る。早う出てくれ」とて、手を取つて引出す。三吉はしくく涙、頬被して泣腫らした目を隠し、脊を取りまとめて腰に付け、見窄らしげにしをくくと去る後影、見るも哀れの極みである。

滋野井「これ三吉ま一度此方へ向け。道中氣を附けて怪我しやんなよ。雨風雪や夜道の折には、腹が痛いとして休んで煩はぬやうにしても。食ひ物に用心して毒な物を食ふなよ。千三百石のお扶持を戴いた者の跡取が、何の罰で斯うも成下つたか」と、身を式臺の段箱に投けて腕いた。そして懷中から一步金十三ヶを取出して袱紗に包み、「これを不時の用意に持つて居よ」とて、涙ながらに渡さうとする。三吉見返り恨めしげに、「母様でも子でもないならば、病まうと死なうと入らぬお構ひ。その金も他人の物は入りませぬ。馬方こそしてても、伊達の興作が總領ちや。ア、胴慾な母様、覺えてゐさつしやれ」と、しやくり上げて泣く。其の顔色は望の光も失せ果てて蒼ざめ、限らない煩悶を濟めて、自暴のきざしが浮かんでゐる。母も亦斷腸の念にくれる。

折節「姫君様のお出立ち」とざざめき渡り、お乳の人のお乗物を平附けに昇き寄せる。滋野井「最前の馬子をこの乗物に引附け、姫君様のお慰みに歌はせよ。幸領「畏つてござりまする。こりや自然生め歌ひ居らう。ヤア此奴泣いてつけかる。芽出度い折からに忌々しい」とて、握拳を振上げて二つ三つくらはす。三吉泣き聲で、「坂は照る照る鈴鹿は曇る、土山間の、間の土山雨が降る」。降るは涙か時雨か、霧立ちこめて一入物の哀れを添へた。

評

大名の縁組の華やかな行列の様を述べて、豊かな世を思はせる。又道中雙六の妙文は、調の軀ならぬ讀者も、其の美辭麗句に心を奪はれて、共に江戸入をするやうなほ笑ましさを感じるであらう。

自然生の三吉は、幸福な武士の家に生れたのであつたが、三歳の時に父母と別れて、天涯放浪の孤兒となつた。彼は馬を追うて漂泊する夜毎々々に、淡い哀愁を感じつつ八年間を経過し、不思議な縁で長年慕つてゐる母に邂逅したが、豫想に反して失望落膽に陥つた。滋野井子別れの場は、この涙の筆である。

親の愛を享受されぬ此の可憐な兒が、如何に成り行くか。これは後に展開する近松の靈腕によつて、その深みを味はひたいものである。

○一粒が何萬石 「一粒萬倍」の語による。近松作「天鼓」に、「上の田も下の田も、穂に穂がさいて一粒萬倍」。西鶴作「日本水代藏」卷一、浪風歸かに神運丸の條に、「諸大名にはいかなる種を前生に蒔き給へる事にぞありける、萬事の自由を見し時は」。この文は、大名の種に生れた者は何萬石の知行を得て、母の胎内にある時から幾萬人に尊敬されるの意。

○舌鼓 したうちして歌ひたへること。この文は、舌で持て舞すを、舞すの縁語「鼓」にいひかけ、鼓の音たんぐを「丹波」にいひかく。

○御湯殿子 お茶の湯なご沸かす間に奉仕する女に手がかかつて生まれた子。「松屋雜記」卷三十八に、「御湯殿」禁中の御湯殿は浴殿に限りたる名にあらず、浴殿の外に男末といふ所あり、そは主上の陰の御膳を調る所也、御茶の湯なご常に沸したる所なれば御湯殿といふ也」とある。大名なごにも其の稱が用ひられた。

○お國腹 大名なごの在國中にできた子。

○打掛 婦女の禮服、帶をしめた上に打掛けて著る小袖。これに十歳の内を缺く即ち十歳に足らぬ意をいひかく。

○高家 江戸時代に公家と武家に涉る諸事用向を掌る家柄。「職掌録」に、「高家」伊勢日光御代、京都御使、並公家衆争向之節、諸事御用向司之。

○稚兒醫者 小兒科の醫師。

丹波與作待夜のこむろぶし

地名 大名に生まるゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人腹の内から敬ひて、持て囃したる舌鼓丹波の國の一城主、由留木殿の御湯殿子調の、姫はお國腹、金水引の初元結まだ十歳の打掛も、すらりとしたる生まれ付東の高家入間殿より、御養子分の約束にて荅から取ル花嫁御、御迎の諸侍五千石を頭にて、騎馬が二十騎稚兒醫者は御輿附、扱大上臈・小上臈・おさし・抱乳母・お乳の人・中臈・下臈の供乗物、又者駕籠はいろは附、以上四百八十挺金銀・瑪瑙・枝珊瑚樹研出し蒔繪の長柄の傘・長刀袋・傘袋、時代の金襴・鶴菱・櫻・花兎・窠に霰・大内桐、覆掛けたる挾箱濃い紅の大紐を、高々と結びしは盛りの牡丹に異らず、臺所荷は次傳馬お葛籠荷物は通し馬、三十駄の馬方の小歌が成つて小綺麗な、聲の好いのをすぐられしも金に、飽

- 大上臈 禁中で最も重賤の女官をいふ。轉じて大名に召使はれる重賤の婦人をもいうた。「臈」は僧の位次、又は仕官の人の年功を積んだこと。
- おさし おさし乳の略。乳をのますたけの乳母。
- お乳の人 貴人の兒女の養育をなす者。
- 又者 階位。
- いろは附 いろはわけにすること。
- 研出し蒔繪 金銀の粉を蒔きつけた上に漆をかけ、其の上を磨いて下の色を現はしたるもの。
- 時代 古く渡來した品物のよい物。
- 鶴菱・櫻・花兎・棠に霞・大内桐 いづれも時代製の紋様である。「鶴菱」は、鶴の翼をひろげたのを菱形の紋にした模様。「棠」は、斜に線をうちちがひにした模様。「花兎」は、角の内に兎が花を銜へた模様。「棠に霞」は、棠の紋に霞の散れる模様である。棠の紋は木瓜さといひ、瓜を輪切にした面の形を紋にしたもの。「大内桐」は桐の紋様で、禁中の御紋章にも用ひられるによつて大内桐といふ。こゝは五三の桐の紋にちなめる桐唐草の模様ある名物裂。
- 袂箱 衣服などを納れ、棒を通して僕人に擔はせ行く箱をいひ、袂竹より轉じた。
- 次傳馬 荷物や書置はせて驛々で交替する宿邊りの馬。驛馬。傳は驛の意。
- 通し馬 驛々で交替しないで目的地へ直行する馬。
- 成つて 出來あがつて。
- 巳の上刻 今の午前九時頃。巳の刻は今の九

丹波與作待夜のこむろぶし

かせし吟味なり、刻限は巳の上刻との定にて、御迎ひの奥家老本田彌三左衛門、數獻の杯、足元はよろよると、狸々緋の道中羽織白い所は髪ばかり、きんか頭に顔色も繻珍の裁著り、しげに、「何とと」お供廻りが揃つたら、お先手から乗出し召され、是さ文左・源五左、身は押へを乗申萬事夜前申渡す通りた、若黨・中間あらしこ、小者に至る迄、大酒を致さぬ様に、馬次ぎ・舟渡し等にて、かうぎがさつを仕つたらば曲事でおじやんべい、又とさ、泊りくらの赤前垂にじやらくら致さない様に、第一お乗物の先で見苦しい、去ながらとさ、長の道中下々が退屈

- 中間 侍と小者との間に位してゐる者で、雜兵の一種。
- あらしこ 荒子と書き、力役に服する人足。
- かうぎがさつ 暴行粗考。按じると、かうぎには敬語で大勢を待んで無理を言ひ強る意なるが、轉じて暴行の意になつたのであらう。「がさつ」はがさくしといふ。即ち手あらいのこと。
- 曲事 道又は法に違ふ事。悪事をなせば刑罰に處せられるにより、曲事を處罰の意にもいふ。
- おぢやんべい じやんべい。
- 赤前垂 宿屋の飯盛女。出女(でをんな)。これ等の女は赤い前垂をしてゐた。
- じやらくら なまめき、ふざけること。近松作「長町女腹切」に「二人火燒のじやらくら、憎や鳥に起されて」。
- 若黨 主の身邊に仕へる若年の家來。(老年の者もある)。
- 押へ 行列の最後につくこと。しんがり。
- 文左・源五左 共に堂領の名。
- 裁著 おもに旅行の時に著し、股引に似た袴で、その裾は脚半に仕立てたもの。たつつけ。「宇貞邊稱」に、「裁著」形輕袷と同制にして、背面に小ハゼ五六箇を設けて紐を用ひしとある。
- きんか頭 禿頭。「きんか」は「きんかん」といひ、さらに光る體をいふ語。金相頭と書きは堂字。
- 足元はよろよと 狸々緋 諸曲、狸々に、「足もとは、よふよふと、酔ひに臥したる枕の夢とあるを應用して「狸々緋」にいひつづけた。

○濡れ 男女間の情事をいふ。こは赤前番の女
さちちくりあふこと。

○ちよこ〜 題目にして、こせづくさま。こ
こは、ちちくりあふまをいふ。「假名手本出陣蔵」
第三に、「噂がりに紛れについちよこ〜」と、手を取り
争ふ。

○女中 女子、婦人の意にいふ。こは蘭の姫を
女中さうたのである。

○召されつちや 「召されぢや」の促音訛。召
されである。

○宰領 荷物を馬に載せて運送する時、之を牽り
行く者をいひ、馬四五頭に宰領一人附いて行く。宰
領の乗る馬を羈尻馬からじりうまといひ、荷を輕
くして本馬の荷の半量、即ち十八匁目を眞はせ、宰
領も荷と共に乗る。

○氣の毒 我が心の煩ひをいふ。こまごこ。

氣の業の對。我が心の苦痛。(梅人の身に就いて不
便に思ひ同情する意にもいふが、それではない)。

○やんちや 小兒が我儘をいうてむつがること。
小兒がむつがる時に「やん〜」といふ。「やんちや」
は、「やんぢや」の約訛である。

○お袋 兒の懐にある養母をいひ、母たつ人の稱。
お袋、兒の懐にある養母をいひ、母たつ人の稱。

○むつかり 小兒の腹立てて泣くをいふ。辰調
深に「むつがる日本紀に懐をよめり、今も小兒に
もはらいふ語なり」。

○肩 墨で書いた肩。袋。

○男切れ 男の切れはし。「男切れこそ無かりけ

致すべし、若し濡れなどを企つるとも、目立たぬ様に物陰へ寄つて、ちよこ〜
ちよこ〜濡れたがよくおんじやる、目出度い折からと申殊に女中のお供だ、少
少の事は見遁しにして置き召されつちや、あつ」と答へて宰領ども、「サア御立」
と催す所に奥より女中聲々に「ア、待たつしやれ〜、氣の毒やお姫様關東へ行
く事は、いやじや〜とやんちやばかり御意なされ、お袋様も殿様も騙しつ叱つ
つ遊ばせども、どふでもいやじやおむつかり、お乳の人の滋野井殿色々と申さ
れても、それ程江戸へ行きたくば乳母ばかり行き居れと、お乳の人の背中をとん
とんと打たしやんして、御機嫌が損ねました」といふ所へ、眉泣き剣がし姫君は
「江戸も東も此方いやじや、己は往かぬ」と泣く〜走り出給へば、侍衆も
下々も、御門に駆け出家老の外男切れこそ無かりけれ、お乳の人数を變へ「これ
申しお姫様、下々の子どもさへ九ツ十では物の聞分けござります、あれ見さんせ、
百里彼方らの山川越へて白髪被いた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに參つて、
江戸へござれば入間殿の總領嫁御と、侍かれるお身じやぞや、お乳の育ての難に
なれば、女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬ、サア好いお子じやお輿に召せ」

れ」とは、男の片影すら無いこの意。西鶴作「代女雀三に、」勝手見れども、男切れのないこのうたでけれ。

○家老殿 東あづまの高家人殿の奥家老本田三左衛門をさす。前文に「白い所は髪ばかり」とある。

○ませ 「申し」の約。

○そやす そのかし、はやす。おたてる。そのかす。近松作「長町女願切」中之巻に、「浮氣馬とそやすれて、月夜も闇もこの里へ。」

○お伽小姓 將軍・大名或は世子・姫君などの幼い頃、その側にあつて徒然の折の相手となる小姓。「小姓」とは、貴人の側に給仕し、膝許の用を辨じるものであつて、年配十三四歳の者がこの役に多い。

○山も見えざる 放ちはやらじと泣きければ「心中江戸三界」といふ當時の流行唄を引用したのである。「山も見えざる」とは、前途茫然として見定めがつかぬ意。

○三界 界隈。あたり。三界は多く名詞と複合語となつて用ひる。「江戸三界」「京三界」「關三界」などといひ、又動詞の「を掃ひて」「寝睡の三界」などともいふ。

○宮仕 仕官の聽宮殿に参り仕らまつる義。「日本紀」出身をよんである。稱して、廣く奉公する事。

○琴の組 琴の組歌の略。「遊遊集」に、「組といふことは三絃の曲より出、おなじ趣の小歌をよせ聚めたるを組といふなり、三絃の組に似て組歌に作りたるは八絃に始れり」とある。八絃松枝は琴

と、威してもそやしても「いや」皆の欺しじや、何の東が好い所腰元共が歌ふ

を聞きや、サア皆爰へ出て、いつもの歌を歌へ」と責め給へば、お伽小姓の

頭是なし十二三なが手を揃へ「山も見へざる假初に江戸三界へ往かんして、いつ

戻らんす事じややら殺して置いて往かんせの、放ちは遣らじと泣きければ、「ア

ア措きや、お大名の宮仕琴の組でも歌はひで、誰に習ふてはでな歌姫様な

どに教やんな、必ず措ひて貰はふ」とお乳の人の無機嫌さ、本田も餘り詮方なく

「申お姫様、あれは人の口でんがう花のお江戸は京勝り、淺草上野の花盛り又

堺町・木挽町の、てんつくくでこのぼう、辨慶や金平が、ゑいやつととゑ

曲の名手で、貞享二年七十二歳で歿す。表組七曲裏組六曲を定めた人である。

○はでな歌 物すきで嫌みのない歌。近松作「心中二枚繪草紙」上之巻に「脇差押取り出でんミすれば、鳥引とせめ、ハテはでな人様ぢや。」

○口でんがう ふざけ言(巫山戯言)。じやうだん。

○堺町 日本橋區にあつて、最近頻りに改稱された。昔は劇場のある地。「東海道名所記」に「堺町の方へ人あまた行く程に、跡に附きて行きて見れば、ここはなほ夥しく、大薩摩小薩摩などにて、扇戸をなべて太鼓を打つ」とある。

○木挽町 京橋區内の町名。古來劇場の所在地。「東海道名所記」に「木挽町の方へ行きたれば、喜太夫が淨瑠璃、其の外資か

舞か、異類異形のものを見する」とある。現今も歌舞伎座、新橋演舞場などがある。

○てんつくく 芝居の囃子太鼓の音調を形容した語。手栴圓持渡の後は昔物語に、「てんつくてんの前を通りてな言ひし、てんつくてんミは芝居の事也、堺町を通りしといふ事也。

○でこのぼう 「でぐるほ」の訛。傀儡くぐつをいふ。木偶(でく)を唄に合はせて舞はせる伎。

○金平 坂田公時の子である。江戸時代の初期に流行した芝居は、金平勇無雙であつて、種々の武功を立て、岩石を砕き人形の首を欲く事なごを演じた。これより幾代な同型の淨瑠璃を金平淨瑠璃と稱した。調の姫は「心中江戸三界」の情死の唄を聞いて江戸を離つてゐるに、又も辨慶や金平が切合ひを見せる三唄にては、彌々江戸へ行くを嫌ふは無理もない。

○御乳 「お乳の人」の略。貴人の兒女の養育をなす者。

○よからう・御家老 目録語の語によつた、即ち脚版語。

○中居 慶元・上女中と下女との中間に位する女中。中通りの召使ひ女。「倭訓栞」に「なかり中居なり、京にて中につかはるゝ女をいふ」。

○剃下げ 頂を剃下けて兩鬢を残したるもの。

○道中雙六 眞享頃に行はれてゐる浄土雙六にならつて作つたもので、江戸から始まり東海道五十三次を繪状に畫き、中央を京都とし、南無佛分身の一字づつを六角の各面に彫つた碁子を振つて、一驛から一驛へ進んで行き、早く京都に達した者を勝とする遊戯である。この文は、姫君の江戸行といふのであるから、道中雙六を京都から始めて、江戸で終るやうに適用したのである。寶永五年頃は道中雙六の流行しはじめた時で、また珍らしかつたのである。

○味な 風味な。一風變つて面白くな。

○おぢや おいでよ。

○擧足 片方の足を折曲げて他方の足の上にあはせること。こゝは、縁先に腰掛けて擧足したのである。

○ありさま 「われさま」(我様)の訛で、對稱代名詞に用ひたのである。おまへさま。貴方。

○あつた。ばこしゆもない。「あつた」は「あた」促音の添加した語で、嫉忌の意を示す接頭語。「ゆこしゆもない」「ばつこしゆもない」「ばつこしゆもない」などともいふ。蓋し「ばこしゆもない」な

いなどと切り合を見せませふ、道中の面白い事富士の山と申、天まで届く山を御目に懸けまする、サアお奥に召しませい」と力一杯賺しても、「いや〜江戸へは往きはせぬどふでもないやじや」と泣給へば、御乳も今はあぐみ果て、どふしてよからふ御家老も呆れて、こそは居られけれ、お中居の若菜は旅出立ち菅笠持つて門外より走り入、なふお乳の人様面白い事がござります、十ッばかりの剃下げの小ぼけな馬方が、道中雙六とやら東海道の繪をひろげ、味な事して遊びます、御機嫌直しに御目に懸けなされませ、
「ヲ、〜能ふぞ氣が付いた、それは聞及ふだ道中の繪を見せまし、お心も移るため馬子でも子供は大事な、お許しじや其丁稚に、持て參れと呼ぶでおじや、
「心得ました」と御門に連れたら來る馬方が片肌脱いで、捌き髪御前近くも無遠慮に、縁先に擧足して、「やれ〜〜ありさま達はあつたばこしゆもない、傍輩共とかげどくに道中雙六打て、沓の錢程してこませふと思ふたに、人を呼び廻つて何でやる、はれやれ〜〜さきり〜乗らしやれ馬遣ろい」とぞつかふどなる、扱々利口な野郎じやな、船頭馬方お乳の人此方も其方等と同じ事、して年は幾つ名は何といふぞ、
「年は今年十一、五つの年

い(無可憐)の時配であらう。勇み立つべくもない。つまらない。面白くもない。

○かけどく 「かけるく(賭博)の訛で、博奕など勝負事に物を賭けること。」「分里馬行脚(正徳六年刊)四之巻に、「賭博にかけどく」と傍訓してある。

○杓の錢 錢包を作り、それを賣つて得る錢。この後の文に、この子の言葉に「晝は馬を追うて夜は杓打ち云々」とある。

○何でやる 何であるの訛。何用でござる。

○きり〜 てきばき。さつさつ。

○馬遣ろい 馬遣りませう。この言葉は馬方が客を呼ぶ時の常用言葉である。

○つかうど ミがりごま。腹立けな無愛想聲。「つかうどは」「つかうどをいひ、」「つかうどは」「つきごま(突置聲)の約訛であらう。

○船頭馬方お乳の人 根性悪であつて口がなない同類の者として、並べて言つた陸である。「西鶴雜記」巻六に、「心たての悪しき者を馬遣・船頭・お乳の人と申せむ。」「觀經三本經」四之巻に、「口のさかなきを馬遣・船頭・お乳の人といふ。」

○若衆 往時男子十三歳になれば前髪を立てて髪を結うた。これを若衆髪といひ、若衆髪を結べる



若衆髪

(女用訓詁圖彙「所載」)

丹波與作待夜のこむろぶし

から馬追ふて一代若衆にならずに、生へぬきの念者じや所で名は自然生の三吉、

「扱も好い名じや聞けば道中雙六があるげな、腰元衆も打つて見や姫様も遊ばせ、

サア三吉も爰へ來い苦しい」と呼びければ、「あい」と言ふより慮外をも願ふ

じかき煙管の煙、立交りたる女中の側そぐはぬ様にも見へざるは、さすが童の一

得と、繪を取り出し雙六を皆立交り遊ばる、

道中雙六

これ〜御覽せ打たしやんせ、これこそ五十三次を、居ながら歩む膝、膝栗毛馬、はいしぬ道中雙六、南無諸佛分身と、書いた六字を六角の、采は櫻木花の都を

者若衆と稱した。

○生えぬきの念者 若衆髪を結うた事もなく、剃下けの絲髪頭になり、生れながらの念者との意。「念者」とは、男色關係にて兒分をいひ、弟分を若衆といふ。

○自然生 やまのいも山芋をいふ。山芋は自然生えぬきの物であるから、以て渾名にしたのである。三吉は三歳で父母に別れ、五歳で馬追となり、若衆髪を結うた事もなく、剃下けの簾髪であるから、「生えぬきの念者」というて平氣な所に哀れを催せる。尤も十一歳の者言としては大人びてゐるやうなれども、つまに浮世の手帳を備めた身には、かくも老成ぶつたのであらう。

○そぐはぬ 添合はぬ義。似合はぬ。約合はぬ。

○一得と 一得である、そして彼は。

○立交り 雙六を打つて立交りはいひかく。

○五十三次 東海道五十三の宿驛。

○膝栗毛馬 略して膝栗毛といふ。膝を以て栗毛馬に代へる義。長道中を健歩すること。健歩旅行。

○はいしぬ道中雙六 馬を追ふ髪はいしぬ〜と、道中雙六にいひかく。

○都 宮處みやこの義。京都。

江・伊勢に跨る。今は中腹に陸道を閉塞して自動車
が通じて居る。

○關 伊勢國鈴鹿郡關町をいひ、五十三次の一。

○龜山 伊勢國鈴鹿郡龜山町をいひ、五十三次の一。今はこの地方物資集散の要地。

○石薬師 伊勢國鈴鹿郡にあつて、庄野と四日市との間。五十三次の一。「火打の石」を石薬師にいひかく。そして前文、みじかき煙管の煙に應じて、煙草を一服するを示した。

○桑名 伊勢國桑名郡桑名町をいひ、五十三次の一。「おつと桑名は、おつと其の手は桑名の焼船といふ地口の話をきかせた。桑名町の北端川口港から宮まで渡舟で行程七里ある。「風花萬葉記」卷九に、「尾州宮之宿より勢州桑名迄七里舟渡し」。

○宮 名古屋市南區熱田をいひ、五十三次の一。

○池鯉鮒 三河國豐海郡知立町をいひ、五十三次の一。

○ころり 采のころがるを、岡崎遊女がころがり寝るの意をいひかく。

○岡崎女郎衆、々々、々々 「采竹初心集」下巻に、「をかざり女郎しゆ岡崎女郎衆、岡崎女郎衆はいいづよろしゅう、岡崎女郎衆はいい女郎衆」とある流行歌に據つた。「岡崎」は岡崎市をいひ、五十三次の一。現今は人口約七萬二千。製絲製綿織布などの工業が盛んである。

○藤川 三河國額田郡にあつて、五十三次の一。藤川の縁語を藤川にいひかく。

○赤坂 三河國寶飯郡赤坂町をいひ、五十三次の一。

か、振袖にヤ此この、新居今切、舟に召せ、蛤召せの、蛤々は濱松まで、舞

坂三里ナ馴染見付の、泊と聞ば、誰も惜まぬ、縞の財布の袋井や、乗掛川を飛下

りて、機嫌笑顔やサア日坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川、采に無の字を打

ぎて舞妓に渡る。この所は蛤の産地である。

○濱松 濱松市で、五十三次の一。「蛤々は濱松」は同じ頭韻によつた所謂頭韻也。

○舞坂 濱名湖の東口にあつて、五十三次の一。「三里」といへるは、舞坂と濱松との間の里程。

○見付 遠江國磐田郡見付町をいひ、五十三次の一。京から江戸へ行く旅人が、ここで初めて富士山を見附けるによつていふ。

○袋井 遠江國磐田郡袋井町をいひ、五十三次の一。この文は、瓢箪を見附けての泊であるから、金もをしまず聞く縞の財布の袋を、袋井にいひかく。

○掛川 遠江國小笠郡掛川町をいひ、五十三次の一。この文は、着らうと乗掛かつたを掛川にいひかけ、乗掛というたから、飛下りの縁語によつていふ。

○日坂の蕨餅 日坂は遠江國小笠郡にあつて、五十三次の一。蕨餅は日坂の名物である。「東海道名所記」に、「日坂はわらび餅の名物なり、蕨の粉にて作り、豆の粉をまぶして旅人にすむるに、往來の人ひたるまぎれに蕨餅なりと思ひて、遂に蕨餅なりとは知らずし」。

○腰なは何ぞ日本一の大井川 橋太郎の鬼ヶ島征伐の時、文句、「腰なは何ぞ日本一の吉備團子」のもどり。

○水の出ばな 血氣盛りの若者を、水の出ばなの若者といふ。よつて若盛りの意から島田(島田誓)につづけた。また水の出盛りの意から、許多の川々が出来て流れるを八十川といふた。

○島田 駿河國志太郡島田町をいひ、大井川の東岸に位す。五十三次の一。

○金谷 遠江國藤原郡金谷町をいひ、大井川の西岸に位す。五十三次の一。

○二日の淀み 駿河・遠江の國境を南に流れてゐる大井川は川會所が管轄し、大水の時は旅行者の塵沙を許さず、之を川留といふた。川留の時は上下の旅客は、川の兩岸にある島田か金谷かに泊る。(下巻追考の「大井川を見よ」)こは雙六であるから、無の字を振出した者は、一回分休むといふのである。

○仕合吉 駄馬の腹帯に「仕合吉」など染抜いてあるにより、それをきかせてかくいうた。

○藤枝 駿河國志太郡藤枝町。五十三次の一。

○岡部 駿河國志太郡岡部町。五十三次の一。

○瀬戸の染飯 瀬戸は島田町と藤枝町との間。志太郡青島町内。染飯はこの地の名物である。

○宇都の山邊の十圍子 宇都の山は駿河國安倍郡にあつて、岡部と丸子との間にある。十圍子はこの地の名物である。

○丸子 駿河國安倍郡長田村丸子をいひ、五十三次の一。今は靜岡市に入る。

○府中 駿府ともいうたが、明治二年靜岡と改稱した。今は人口約十五萬。

出せば水の出ばなの八十川の嶋田、金谷に二日の淀み、仕合吉の旅雙六里、七里八里も只一足に、先へ先へと咲懸りたる、藤枝岡部瀬戸の染飯、宇都の山邊の十圍子、所々の、名物買ふてお錢つくつくつく手鞠子に、一二三四、府中江尻にすつとんく、とんと打つたる興津波、松原晴る、膏藥買ふて月を吸ひ出せ清見寺、由比・蒲原や吉原の花の蒲焼名物の、鰻の膚沼津の宿、三島越ゆれば箱根へ三里、采目次第に關越ゆる、悪い目打てば手判を取に、元の京へ立歸る、合點かヲ、呑込んだ、小田原外郎・大磯・平塚・藤澤の、障りもなしに雙六の幸先、も好し門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川越へ川崎を越へ品川越へ、まづ先駈のお姫様、一番勝に勝色の花のお江戸に著給ふ、一の裏は雙六の幸あり悦あり、慰みありける道中とどつと、興にぞ入り給ふ

お側の衆に囃されて幼な心の姫君、「斯う面白ひ東とは今迄己は知らなんだ、サア往かふ早往かふ」、「ヤアござらふとおつしやるか、そりや目出度いはく又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ」と立騒ぐお乳の人は男みをなし、「そんならま一度大殿様お袋様とお杯、是も馬子殿お蔭じや出来いたく、其方には禮言ふ褒

○江尻 駿河國庵原郡江尻町をいひ、五十三次の一。今は清水市に入る。

○すつとんく 滞りなく速に進むさま。すつとんく。

○打つ 采を打つに、波の打つをいひかく。

○興津 駿河國庵原郡興津町をいひ、五十三次の一。これに「沖つ波をいひかく。

○松原 三保の松原で、富士觀望の勝地である。

○清見寺 興津町にある互利。この所の家々に清見寺舊業を賣る。

○由比・蒲原 共に駿河國庵原郡にある町名で、五十三次の一。

○吉原 駿河國富士郡吉原町。五十三次の一。

○沼津 沼津市をいひ、五十三次の一。この文は、鰯の腐ぬめを沼津にいひかく。沼津及び其の西方新田「しんでんは鰯の蒲焼が名物である。東海道名所記」に、「新田、この所に鰯の蒲焼を賣る」と見え、又「東海道中膝栗毛」に、「新田と云へる猪場に至る、爰は鰯名物にて家毎にあふぎたつた蒲焼の匂に、二人は鼻のさきをひこつかし云々」とある。

又「國花蕪葉記」巻八に、「新田、この所にて鰯のかほやきを賣る也、吉原の沼よりあがる」とある。

○三島 伊豆國田方郡三島町をいひ、五十三次の一。三島箱根間三里というをれが、國花蕪葉記「巻八」に、箱根より三島まで三里三十町」とある。

○關 箱根の關をいひ、五十三次の一。今は元箱根に關址があり、史蹟として指定されて居る。この關は新居の關と共に最も要所の一であつた。

美遣る、其處に待ちやヤ」とざざめき渡り奥にお供し入にけり、馬方は遂に見ぬ金の間をうそくと、覗き見廻れど筵の外踏みも、習はぬ備後表「エ、此座敷はきやうに滑つて歩かれぬ、大名の家よりも、此方の内がけつこでござる」と獨り言して居たりけり、お乳の人は大高にお菓子様々文匣に盛り入、どれどれ三吉其處にか、まあ其方はけな者じや、道中雙六お目にかけてそれ故に姫君様、お江戸

○小田原外郎 小田原は相模國足柄下郡にあつて、五十三次の一。「外郎」は硬い小粒の丸薬で、效能も今の清心丹や仁丹の類である。そして小田原の名物である。

○大磯 相模國中郡大磯町をいひ、五十三次の一。

○平塚 相模國平塚市をいひ、五十三次の一。

○藤澤 相模國高座郡藤澤町をいひ、五十三次の一。

○とつかは 急ぎあわてるさま。これに戸塚をいひかく。戸塚は相模國鎌倉郡戸塚町をいひ、五十三次の一。

○程が谷 横濱市保土ヶ谷區をいひ、五十三次の一。

○神奈川 横濱市神奈川區をいひ、五十三次の一。

○川崎 川崎市をいひ、五十三次の一。

○勝色 深藍色をいひ、轉じて黒色をいふ。道中雙六の畫が江戸を黒色を以て描いてあつたのである。この文は、勝ちに勝色をいひかく。

○一の裏は雙六 普通の目もりの采に就いていうた。そして雙六に直六すなわくをいひかく。

○金の間 金徳「きんぶすま」の間(ま)。

○うそくと うすく(薄ぐの)の。人に知れぬやうにかすかに爲るさま。こそく。近松作「百日曾我第三」に、「小聲に呼うでうそくと、悲ねまはる」。

○備後表 備後の福山・尾道地方から産出する襦表をいひ、古來佳品として其の名が聞えてゐる。

○ぎやう たいさう(大相)。はなはだ。「仰」の字を當つれども、思ふに「葉々し」の「葉」であらう。

○けつこ けつこ(結構)。

○大高 大高煙紙をいふ。大形の煙紙。厚くして白く、面に皺あつて上品な紙である。「薩州府志」七土産門に、「煙紙自備中來、其漚し之人員古有家領、此紙備言口宜價紙等用之、或製大高小高、或稱引合、又調引、大小高則紙大小之號也。」

○文匣 「薩州府志」七土産門に、「文匣」以紙貼「富之内外、塗漆其上、或盛香餅、或藏雜品紙、是稱文匣」。文匣の蓋に大高を敷き、その上に種々な菓子を盛入れたのである。

○けな者 殊勝な者。「け」は「果」であつて、群に勝れ常に異る意。

○お上 御前即ち殿様の奥方をさす。

○御前 貴人の奥方の敬稱。殿様の奥方の敬稱。

○人倫訓業圖彙卷一に、「御前様」武家大名の内室。

○おあし三筋 織百文(普通九十六文しかない)を摺(すり)さしに貫いたもの三筋、即ち三百文。中古、織を要脚(ようけつ)さいひ、女言葉に「おあしさいふ」。

○通し 騾(ろ)々で交替しないで目的地へ直行する考。

○慮外 思ひがけぬこも、轉じて無禮の意にいふ。

○むしやぶり附き むさほりつき(眞附)の訛。さはり附き。

○家中 大小名の家來の總稱。

○番頭 近習頭をいふ。主君の側近く勤める者の頭役。伊達製作は當て千三百石取りの番頭であつた。

○おろ覚え おほろ伊(關)氣に覺えてゐること。

○杏掛 山城國乙訓郡大枝村杏掛(大江山東の驛舎)をいうたのであらう。

○鳥羽の祭 京都市下京區鳥羽にある城南神社の祭禮をいうたのであらう。例祭は九月二十日である。

○死んでのける 死んでしまふ。「のける」は萬事かたづく意。終る。(見索引)

○石部 近江國甲賀郡石部町。五十三次の一。

○馬借 宿驛では馬方に馬を貸して其の賃料を取つてゐた家があつた。これを馬借といつた。

へ御ざろと御意なさるゝ、お上にも御機嫌、是は御前のお菓子有難ふ戴きや、お
 錢三筋買いたい物買や、殊に其方は通しじやげな道中すがらも用あらば、お乳
 の人の滋野井に逢はふと言や、見れば見る程好い子じやに馬方させる親の身は、
 よくくで有ふ」といと懇ろの詞の末、三吉つくく聞澄し、由留木殿の御内お
 乳の人の滋野井様とはお前か、そんなりや己が母様」と抱き附ば「ア、こは慮外
 な、汝が母様とは馬方の子は持たぬ」と、もぎ放せばむしやぶり附き引のくれば
 縋り附、何の無い事申ませふ、わしが親はお前の昔の連合ひ、此御家中にて番頭
 伊達の與作、其子は私此方様の腹から出た、與之介はわしじやはいの、父様は
 殿様のお氣に違ふて、國をお出なされたは三つの時でおろ覚え、杏掛の姥が話に
 は、母様も離別とやらで殿様に御奉公此方を、姥が養育し父様に逢はせたふ思へ
 共甲斐もない、母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋野井様と尋
 ねよと、懇ろに教へて姥は己が五つの年、久しう痰を煩ふて擧句に鳥羽の祭に往
 て、餅が咽に詰つて遂に死んでのけました、在所の衆が養ひて漸う馬を追ひ習ひ、
 今は近江の石部の馬借に奉公しまする、是守袋を見さしやんせ何の嘘を申ませ

○打ちまする 作りまする。音を作るを「音を打つ」といふ。

◇讀者は、「三吉が親を思ふにいらしい姿に泣かされるであらう。

○百千色の憂き涙 五色の涙といふの類であつて、斷腸の憂き思にうれて出る涙。

○とても 助詞として「も」の添はつた副詞。どうで。

○尋常 「尋常に勝負せよ」などいふ尋常と同じ語で、立派又は殊勝の意。

○剃下げ 頭髮を剃り下げたのは、卑しくて野暮「やば」な者よされたのである。

○こけ猿 髪を細つた猿。「こけ」は「髪をこける」類がこける「なごいふ」「け」と同じ語で、肉著し細つたるをいふ。

○氏より育ち 人の賢愚また人品の高卑などは、家柄筋目よりも姓方「しつかけかた」の如何によりて如何やうにもなるこの意の語。

ふ、お前の子に紛れはない外に望みは何にもない、父様を尋ね出し一日なり共三人一所に居て下され見事杵も打まする、此草鞋も私が作つた、晝は馬を追ふて夜は杵打ち草鞋作り、父様母様養ひませふ、父様と一つに居て下され、拜みまする母様」と取付き抱附、泣き居たり、お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我子の與之介守袋も覺有、飛附て懷に抱き入たく氣は急け共、アツア大事の御奉公養ひ君のお名の疵、偽つて叱らふかイヤ可愛げにそふも成まい、まあちよつと抱きたいア、どふせふと、百千色の憂き涙、二つの目には保ちかね咽び、沈みて居たりしが、いや／＼我子ながらも賢しい者偽つて誠とせず、母を心の穢い者と蔑まるゝも情なし、譯を語つて合點させ恥おしめて歸さんものと、涙拭ふて氣を鎮め「爰へ來い與之介」と、引寄せて兩手を取、扱も大きうなりやつたの、
* とても成人せふならば、侍らしう何故尋常にも育たぬぞ、顔の道具手足まで母は斯ふは生み附ぬ、美しい黒髪を此様に剃下げて、手足は山のこけ猿じやほんに氏より育ちぞ」と又さめ／＼と泣けるが、是物を合點しや、腹から産んだは産んだれ共、今では子でも母でもない、淺ましく成下つたを嫌ふて言ふでは更々ない、

○御前様 武家大名の内室の敬稱(既出)

○奥小姓 奥勤めをする小姓。「小姓」に就いては既に述べた。奥作は血氣盛りの年配で奥小姓を勤めて居たのである。索引によつて「表小姓」をも見よ。

○お次 貴人の御座所の次の間(ま)。

○小姓目付 小姓衆を監督する役。

○お家 貴人の家の敬稱。こゝは丹波の城主由留本家をさす。

○法度 おきて。制度。轉じて、禁制の意にいふ。

○御前様の御身 御訴訟 滋野井の不義の罪は、我が不徳の教す所であるから、我を罪して彼を助けよと、殿様の奥方の御言上。

○奏者役 奏者番ともいひ、武家時代にあつた職名で、主君に事を奏聞し、また取次などをする役。

○追腹 主君の死せる時、其の後を追うて切腹すること。腹を切つて殉死すること。主君から寵愛を蒙つた者が、主君に死なれては恩を報ずることが出来ず、爲に主君の後を慕うて殉死するのである。

○御内證 人の妻を稱する敬語。御奥方。

○山谷 三谷または三野とも書いてある。江戸吉原遊廓の地をいふ。

○奉公構ひの御改易 徳川時代に武士の受け利。奉公を止めて許さず、旗籍を除き、家祿を召上げ、領地・邸宅を没收すること。切腹よりは軽く、黜居よりは重い。

○ことわり 道理をいひわけること。理解。

○勘氣の末 勘當を受けた者の子孫。「勘氣」は

こゝの譯を能ふ聞きやや、母はもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓互に若氣の戀風に、すれつ縫れつ一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次に落し小姓目付に拾はれ、武家の作法といふ内に殊にお家は御法度厳しく、御家老衆の評定父も母も御成敗と極まりしを、御前様の御身に代へお命かけての御訴訟、殿様の御慈悲にて科を赦され其上に、表立つて夫婦になされ與作殿は段々に、奏者役番頭千三百石迄お取立、追腹程の御恩の家其間に其方を儲け、上には姫様御誕生御内證の誼みにて、母が乳を上まし首尾さへよければ其方も今、家老衆の子同然に二番と下座に下らぬ人、情なや父様が江戸詰の山谷通ひ、大事の所を仕損ひ又切腹に極つた、なれども腹を切せては女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の乳離れ御病氣も出ればいかゞとて、母を其儘残さふ爲父様の命助かり、奉公構ひの御改易其時母も一所に退けば、尤夫婦の道は立つお姫様の乳離れ、お苦しみをかけまし身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報せん残つて御恩を報じてくれと、父様のことはり故第一は男の爲、夫婦の義理を忠義に代へて、飽かぬ離別をしたはいの、男の子は幼ふても御勘氣の末氣遣ひな、與作が子とはし言やんなやサア

勸富の氣色の義、君父が臣子を責めてしりぞけること。

○ばし 或語に添へて語意を強める接尾語。

○乳兄弟 同じ乳母で育つた者の互に呼ぶ稱。

○訴訟 言上らんじやう。

○先は他人の世間體 今後は調の姫とは何の縁もない他人であるこの世間體をよそほはねばならぬ。

○蟻の穴から隄も崩れる 小事終に大事を起すに喩へる語。「韓非子」喻老篇に、「千丈之隄以三蟻之穴潰」。

○じよさい 「如在」で、「ぞんざい」(存在)と等しく、ありの儘といふこと、丁寧にせぬ義であらう。疎略(ぬかり)。ておち。(この語を、論語の「祭如在、祭神如神在」から出たとする説はいかがい)。

○まつべる 袖(たもと)を集める。まじめる。「倭調架」に、「まつめる」俗語なり、全集める義にや、軍場などに人をまつめるなごいへり。

早ふ御門へ出や、ア、如何なる因果な、生れ性、現在我子に馬追させ、男の行方

も知らぬ身が母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと玉の輿に乗つたとて、是が何に成事と聲を、忍びに泣ばかり、子は生れ付賢くて聞分け有程なほ泣入、

「悲しい咄を聞きました去ながら常に姥が申たは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢ふたらば、父様も出世なさるる由、御訴訟なされ下されかし」

と、言へばちやつと口を押へ「ア、物體ない、其乳兄弟言はぬ事、姫君様は

關東へ養子嫁御にお下り、高いも低いも姫御前は大事の物、先は他人の世間體、

三吉と云馬追が乳兄弟に有などと、どふ妨げにならふやら蟻の穴から隄も崩れる、

軽い様で重い事ひそく言ふて人も聞、先早ふ出てくれ」と泣くくいへば三吉、

「ア、母様餘り遠慮過ぎました、先言ふて見て下され」地「まだ言ひ居るか聞分け

ない、夫の事我子の事母に如在が有物が、合點の悪い聞分けない」と制する内に

奥よりも、お乳の人は何處にぞ、御前から召ます」と呼ばはれば、あれ聞きや人

が来る出でたも」と、手を取て引出す不便や三吉しく涙、頬被りして目を隠

し沓見まつべて腰に附、見窄らしげな後影、こりやま一度此方ら向きや、山川で

○作病 には病氣。假病けびやう。狂言「二人大名に、「作病をおこし勝つて、供にうせなんでござる。」

○世取 あまごり。相續人。近松作「冥途の飛脚」上之巻に、「これの世取に貰ひしが。」

○式臺の段箱 玄關の前に設けた板敷を式臺といひ、式臺からあがる段を箱のやうに造つてあるもの。

○壹歩 壹歩判金であつて、一兩の四分の一に當る。

○たしなみ 用意。事ある時の心がけ。

○覺えて居しやつしやれ 恨める心を極言したものである。そしてこの失望は、後に興作の名をなつかしがつて、その爲に人を殺し、身をつるも厭はぬ行動の伏線となる。

○平附 ぢかに寄せ附けること。ぢがつけ。

○ぎこつなく 無愛想でがさ／＼しく。ぎこつしい事を「ぎこつ」といひ、「なし」は甚しの意。

○ほえ居る 泣き居る。泣くを「ほえる」といふ。泣きつらさを「ほえつら」といふ。

○坂は照る／＼ 雨が降る。小笠原の唄である。「松の落葉」元禄十七年刊巻四「馬土踊に、「坂は照る照る鈴鹿は曇る、こまはいと、うてはほいとうし、間の土山雨が降る。」

○坂 (既出)

○間の土山 間とは、土山が甲斐山(大岡山)と鈴鹿山との間にあるからであらう。

怪我しやんな雨風雪降り夜道には腹が痛いと作病起し、二日も三日も休んで煩はぬ様にしてたも、毒な食物はすに腹や麻疹の用心しや、可愛の形やいた／＼しや、千三百石の世取が何の罰ぞ咎めぞ」と、式臺の段箱に身を投げ、伏して歎きしが、懷中の有合壹歩十三袱紗に包み、「是たしなみに持つて居や」と、涙ながらに渡さる、三吉見返り恨めしげに、「母でも子でも無いならば、病ふと死なふといらぬお構ひ、其一步もいらぬ馬方こそすれ伊達の興作が惣領じや、母様でもない他人に金貫はふ筈がない、エ、胸慾な母様覺えて居しやつしやれ」と、わつと泣き出す其有様母は魂消へ入て、「養ひ君お家の御恩思はずは扱一人子を手放して、何の遣らふぞ奉公の身の淺ましや」と、悶へ、焦れて歎きける、時に奥口ざゞめいて「早御立」と姫君の、御輿昇き上げ行列立て、お乳の人の乗物を平附にこそ昇き寄せられ、お乳はさあらぬ顔附して「姫君のお伽に、最前の馬方を此乗物に引付、お慰みに歌はしや」「畏つた」と幸領共、「こりやそこな自然生め、歌ひ居らふ」とぎこつなく「ヤア此奴はほへ居るか何じやこりや忌々し」と、握り拳を二ツ三ツ戴きながら泣き聲に「坂は照る／＼、鈴鹿は曇る、土山あひの、間の土山雨が

降る、降る雨よりも親子の涙中に、時雨る、雨宿り

中之巻 (關宿の白子屋。本陣宿。關の野道)

登場人物の主な者

小 萬 (白子屋左次の内の出女) 小 女 郎 (白子屋左次の内の出女) 小 女 郎 (白子屋左次の内の出女)

關宿を通る旅人等 丹 波 與 作 (馬方。小萬の愛人。三十一歳) 自然生の三吉 (馬方。十一歳) 左 次 (白子屋の主人)

麥 糠 八 藏 (馬方) 庄屋・問屋・組中の者 白子屋の主婦 本陣・下宿の諸侍 隣町隣家の者等 夜廻りの侍

滋 野 井 (由留木侯の息女調の姫) 本陣彌三左衛門 (奥家老)

梗概

關宿の白子屋左次の内に奉公する東海道名取りの出女(飯籠屋の)、小萬・小女郎・小よしは赤前垂を纏うて、客引きに門口に立ち、「これ泊ぢやないかえ、泊なら泊らんせ。旅籠安うて泊めませう」などと呼ばはる。そして彼等はいづれも内職に苧を績む麻小笠を片手に持ち、「あの旅人は京の八幡の生れやら、足に牛蒡の毛がむくくぢや(八幡は牛蒡の名産地なれ)。これへ見えた飛脚の足元のねばいは、三河(膠の)者に極つた。常陸の衣は帯で知る(常陸帯の縁に)」などと互に語り合つてゐる。

小萬は出女のあさましい境遇を嘆き、又小女郎の情夫の事を話し合ふ。そして小よしから己が情夫與作の不身持を聞いて、は

らくと涙を流し、「横田村の私が父様二石二斗の滞納處分にあひ、老體で水牢に入れられました。お大名へも知られた關の小萬が、父様を水牢では死なされず。代官所に秋納めまで延ばして下されと願ひ、私が請人に立つて牢から出しましたが、何をあてどに納めやうもありませぬ。それに與作殿の身も庇うてやりたいと、其の念力一つで立てる身が、其の人の悪い噂を聞いては、頼もしけもない憂き世でござんすわいな」と悲歎にくれ、與作を氣遣うて逢ひたがる。

折節山陰の彼方から、「扱も見事なそんれはお葛籠馬や、七つ蒲團にツンレハ曲象据ゑて」と、與作の歌ふ生粹の小室節の鼻唄が聞えて来る。小萬は勇み立ち、「アレ與作殿々々」と小手招きする。やがて與作は白子屋の店先に馬を引附け、「こりや小萬、この旦那殿をお泊め申せ。お供ともに三人ぢや。サア旦那殿下りさつしやれ」とて、客の荷物を解く。小女郎・小よしは取々に、「入らつしやいませ。誰かお客様のお足を洗ふお湯を持つて来て下さい。お客様どうぞ奥座敷へお通りなされ。外にお客様もござりませぬから、廣々と明けひろけてお休みなされませ」とて、客と伴つて奥へ入つた。

與作は急いで客の荷物を投卸し、「小萬この中途はなんだ。無事な顔を見て嬉しい。その内にゆつくり逢はう」と、氣急がしう馬の口を取つて駈出す。小萬は馬の手綱に縋り附き、「待つて下さい。話したい事が山ほどある。さうあわてないで待たしやんせ」と引戻す。與作「エ、邪魔するな。話はいつでも出来る。急な事ぢや。放してくれ」と、振切れば小萬抱止めて、「何がそれ程急がしうござんする。何か胸に一物あるわいの。譯を聞かねば遣りませぬ」と、店先に抱据ゑる。與作「ハテ荷へ一物をさへ卸したに一物あるものか。心配させない爲手短に話さう。まあ己が不仕合を聞いてくれ。傍輩の瀬田の久三等と博打して大勝。鈴鹿で打つて又勝つた。これで止せばよかつたに、慾には見えぬ目川村(近江の草津と)の馬方と打つて大負、前の勝を皆取られた上に大分の損をした。そこでこの損を梅(壇)の木(氣)の是齋の辻(梅木は近江國草津と石部との間にあつて、本名を六地藏村と)で、あべこべにしてやられ、大津八町(舊大津・旅籠町)・小野の宿(今は近江國坂田)・土山の田村堂でも負け續け、八藏めに八貫の借銭を負うて、蜂の螫すやうに拂へくと催促される。此方や無一文だし、博打に勝つて返さうと思ひ、馬を抵當に入れて八貫の勝負を

したが又負けた。八めは「さあ馬を渡せ」と追うて来る。此方や親方の馬を取られては鼻の下が干あがる。八めが来ぬ内に早う内へ往にたい。放してくれ」と、溜息をついて語つた。小萬「何といふさもしいお心にならんした。昔は千三百石のお侍であつた歴々のお方が、出女の私と思ひ思はれる仲となつたも、嬉しいやら悲しいやら一倍いとしうござんする。その其方に悪い病が附きました。父親の事も氣遣つてゐる私が身を案じても下んせす、賭博三昧の悪逆び。扱も情ないお心と、思へば熱い涙がこほれます」と泣き入る。與作も共に泣き、「千三百石の扶持を放れて馬追にまで落ちぶれた。これも主の天罰と諦めもするが、賭博三昧と言はれては酷いぞや。皆これ其方の親を救はうと思つた事ぢや」ともがく。小萬手を合はせ、「そのお心とは知らず恨みました、堪忍して下さなせ。父様の事は、私が著物を賣り傍輩にも無心を言うて、百三十匁調へましたから落著いて下んせ。日が暮れて時も経ちますから、よもや八も来ますまい。泊人はなし私も隙。馬は向ひへ繋いで中の間に寐て歸らんせ。しつほりと話したい事もござんする」とて、與作の草鞋の紐を解く。

折から石部の八藏は、きよろ／＼眼して尋ね來り、「ヤア與作、己の馬を牽いて逃げをつた。美濃路までも知れ渡つた麥糠の八藏ぢや。目の荒い男知らぬかやい。泥坊め」とて、繋いだ馬を牽いて歸らうとする。與作飛びかかつて八藏の手を捻上げ、「己は丹波の與作ぢや。其の馬を遣つたら其方や機嫌が好からうが、此方や困る。爲ないやい、ほてつばらめ（布袋腹めの義。馬を叱る時にいふ語。それを用ひ）」と、八藏の手から手綱を奪ふ。八藏「何だ其の男立は借りた金を濟してから言へ。腕づくならサア來い」と掴みかかる。

小萬は八藏に泣き付き、「なう八藏さん、此方の難儀も祭してお互に堪忍したがよいわいな。八藏「ヤイ女子め、其の涙は與作の爲に泣け。此方や有難くないわい。その馬は貸した錢の代りに取るが勘辨ぢや」。小萬「いやそりやさせぬ。この馬は小萬が遣らぬ、關の小萬が遣らぬぞ」と、蛾眉を逆立てた姿は、さすが海道名取女と頷かれた。

八藏「何ぬかす死女郎め、撲つぞ」。小萬「オ、女子を相手になら爲や」。八藏「よしきた」と、鞭を以て小萬をはたと打つ。與作は小萬を引退け、「小萬を打つた返禮ぢや」とて、拳を固めて八藏の目鼻の間を缺けてのけと打つた。八藏は掴みかかつて

與作の鬚を握り、互に投けつ投けられつ、打ちつ打たれたつ摺み合ふ。誠に馬子の喧嘩とて馬の踏み合ふ如くである。與作は柔術にかけて、八藏の腰背も砕けよと門柱に投飛ばした。八藏は痛みを押へながら起上つて睨み附け、「どう拘盜め覺えてけつかれ。問屋・馬差(馬の指圖をする宿驛の役人)・親方へ斷つて、馬方をやめさせ、乞食にしてくれう」と、身を捻振つて歸る。小萬「これ八藏さん、公用勤める馬方が馬差・親方に斷られたら、何處で身が立つ。私が手を合はせる。謝罪からは、男ぢやさつぱりと堪忍して下され」。八藏「十六貫貸した上に投けられて堪忍したら、其方也好からうが此方や悪い。ここの門口から與作の博奕打め泥坊めとわめてやる」。小萬「なうさう言はずと、ここに百三十匁命代りの銀なれども、これを渡すから濟して下され」と取出す。八藏はこれを引つたくつて巾著に捻込み、「銀十三匁に錢一貫文替ぢや。残り六貫もきつと濟せよ」と歸つた。

小萬は小首を傾けて溜息つき、「これ與作殿、私が持つてゐたさつき銀を八藏に渡して去なせました。これに懲りて彼等と交際つて下んすな」。與作驚き、「イヤその銀渡してよいものか。取返さう」と立上がる。小萬「これ待たしやんせ。借りた物は返さにやならぬ。馬借問屋へ斷られ悪名が立つたら、其方の身も廢ります。それが萬一お國へ聞えたら、その恥辱は取返しもつきませぬ。父様の滯納の事は、私が延べられるだけは言ひ延ばし、叶はぬ其の時は、父様の代りに私が水牢に入る覺悟でござんす。差當つた其方の難儀を救へば本望ぢやわいな」。與作「イヤ馬方風情に何の恥辱がある。憂き身やつすも親の爲ぢや。其の銀遣つてなるものか」とて、駈出したが跡戻りして、「エ、しまつた。何事が出来たやら、これの旦那左次殿が問屋組中と連立つて戻られる。見附けられたら面倒だ、早う隠れたい。その馬もどこぞへ牽いてくれ」とて、隣の店の幕の陰にある乗物の中に片足を踏込めば、乗物の中から「あ痛く。横腹を踏みくさつたは誰ぢや」と、丁稚が大あくびしてによつと出る。

與作「ヤア石部の自然生か」。三吉「與作殿か」。與作「其方やどうして爰に居る」。三吉「己や江戸へ通しの馬を追つて木陣(大小名其の他武家の公用旅舎をいふ。蓋し本營の義で 戰國時代行軍の詞の残れるものである)に泊るが、夕飯過ぎから眠たうて爰でぐつと寐込んだ。お前様はどうしたのぢや」。與作「いや何でもない。隣の旦那に逢ひたうないから、ちよつと隠してくれ」。三吉あたりを透し見て、「其處なは小萬か。己や

疾うから皆聞いた。外の者ならぬが、與作と聞いてはいとしい。其の名で己や引きはせぬ、隠してやらう。サア這入りや」と、駕籠に入れて膝押合ふ。蓋し母に逢うて失望した三吉は、この人が父と同じ名であるからは、若しや我が父にてもあらうかと思ひ焦れて、水火も辭せず身命も惜しまぬ心となつてゐるのであらう。

左次は門口から聲を掛け、「家内の者ども皆起きよ。問屋殿・庄屋殿・組中残らずござつた」といふを聞いて、主婦も出女も皆表へ出る。庄屋・問屋口を揃へ、「今日の寄合はこれの小萬について代官所からのお呼出しぢや。小萬が父親横田の彦兵衛が滯納處分にあひ水牢に入れられたを、小萬が請人に立つて出牢仰せ附けられた。宿中からきつと取立て納められいとて、小萬をお預けぢや」と言渡す。小萬俯向いて涙ぐむ。主婦「これ小萬、いやな事を出来して主人に厄介をかけやるか」。左次「イヤ何の厄介があるものか。此方や一文も知らぬ。上り下りの旅人衆も小萬と聞いては氣がねして、百やる纏頭も二百はずまつしやる。それに彼は一匁の貫も目方たつぷり取り居る。百目や二兩は半年にも溜れども、與作といふ博奕打の盗人めにありたけこたげ見繼ぎ、半掛(片方)に褌袴一枚無ささうな。その與作が又拔群な大食をやつて錢も拂はぬ。與作の身の皮剥いでも二石二斗が物はない。馬を質に押へて彼奴にきつと濟させねばならぬ。まづ小萬を内へ入れて置きや。皆様御大儀でござる」とて、辭儀もそこくに戸を締めて錠をおろした。庄屋・問屋等口々に「與作といふ奴は大食の上に、まだ小萬の物まで食ひ居る」と、語りながら歸る。その後と與作は乗物を這出で、首を伸ばして白子屋の竹の出格子を覗けば、内から顔がによつと出る。與作はツと驚き首をちやつと引けば、内から「氣遣ない。コレ私ぢや」。與作「小萬か」。小萬「與作殿か。今のを聞いて下んせ、悲しい事になりました。私や駕籠の鳥になつたわいの。私が斯うなるからは、もう父様に難儀はかからぬ。此方様とは又も逢はれうやら、逢はれぬやら、これが別れにならうやら、お上の事は知れませぬ」と、與作の手に取附いて泣く。

與作「イヤ望が出来たぞ。どうした縁やら三吉めが、與作といふ名を慕つて常に己を大事にする。今もあの乗物の中で三吉に逢ひ、本陣に泊られた大名の金を盗んでくれまいか。男と見込んで頼むと賺した。すると彼奴めがふはと己の口車に乗つて、成

程盗んでくれうといふ。うまく行けば上々、しくじつても元ぢや」と囁けば、小萬「イヤ／＼人まで罪に落す事止して下さんせ」。與作「ハテ氣の狭い。これ三吉しつかり頼んだ」。三吉「オ、與作に頼まれて引きはせぬ。親はなし一門なし。五文餅よりも小さなこの首、意氣づくなら取られたとて儘ぢや。盗みして捕へられ首切られるに不思議はない」。與作「オ、頼もしい、命かけて頼んだ」。三吉「とかく味方があつては氣怯れする。何處ぞへとつと退いて居や。ヤア小萬さんの守袋を預かつてくれ。小萬「ハテお守は首に懸けて居やいの」。三吉「イヤ／＼これには私の本名が書いてある。若し捕へられてこれを見られたら恥辱ぢや」として小萬に渡し、裾引つからけて本陣に忍び入つた。與作「これ小萬、己や坂の下の彌六が方へ退いて、夜中時分に戻らう」。小萬「私や危うてきや／＼する。南無地藏様々々」。與作「エ、今願立がきくものか」。小萬「聲が高い。ひそかに／＼」と、聲はひそ／＼胸はどき／＼、でこぼこの坂の下へと別れた。

本陣宿は武士に護られて、夜廻りの拍子木の音が響き渡る。子供心のあどけなさは、盗みおぼせた嬉しさに、拍子木の音の近づくも氣附かず、金欄の財布を提げて門口からすつと出る。夜廻りの侍らりと見附けて慕ひ寄せれば、三吉はうろたへて乗物の中に逃込み、内から戸をはたと締めた。侍は其の戸をしつかと押へ、簾を上げて、「ヤアうぬは馬子の三吉ぢやな。これは御前(大名の)のお金袋ぢや。盗人を押へた出合へ／＼」と呼ばはる。本陣・下宿の諸侍、隣町隣家の者ども棒・乳切木(兩端少し太く、中を提げて駈附け、乗物を道の真中に昇据ゑ、高提灯を掲げてあたり照しう取巻いた。當番「丁稚つれに大げさな。その馬子引出せ。荒子等「畏つた」と戸を明けて、「サア出よ」と、小腕取つて引出す。三吉きよろりとして、「旦那様、盗んだ金は返します」。當番「これは子供供ばかりの業ではあるまい。喰した同類を詮索せよ。馬差は居らぬか。當宿に泊つた馬方ども残らず召寄せよ」。馬差「あい」と答へて觸れ廻り、馬方を呼集める。八藏も關に泊つてゐたが泥酔して來り、「泥坊は何奴ぢやい。ヤア老成の自然生めか。どうでろくな死方はすまいと思つてゐるが全くぢや。我等仲間の恥晒し、エ、稜柱め」とて、脊骨をしたたか踏んだ。三吉は俯向にかつばと伏し、額を石で撞破り血が流れる。侍「こりやそこな馬方何をする」と八藏を叱る。三吉は恨めしげに

齒がみをなし、「コリヤ八藏、覺えて居れ。首が飛んだら汝の面へ嚙附いてくれうぞ」と睨んだ。

お乳の人も聞附け、胸騒ぎして駈出れば、我が子が大勢に取巻かれてゐるので、はつと氣も亂れ腰も抜けて泣入つたが、人々に悟られまいと心を取直しても、不便さ憎さ腹立ちさ千々に亂れて、「ヤイ其方は國から目を懸けて情を加へた甲斐もなく、さもない事を出来したな。親が見たら何と思ふ。犯した罪は助けられずとも、心の中では神佛に命乞ひしてもがくぞや。子供心に盗みする筈がない。父親が貧うて言附けたか、人に頼まれたか、言譯あらばしてくれよ。姫君様のお名を思はずば、私が産んだ子で、姫君様の乳兄弟と言うてなりとも助けたい」と、傍目にも祭してくれよかしの心遣は、言葉の端にも現はれた。三吉も母の顔をつくんと眺めて涙にくれ、「申しお乳の人様、馬方が盗みしたとて誰恥かしいとも思はねども、お前様一人に恥かしい。父様の爲かとは恨めしい仰やな。父様がある程なら馬追は致しませぬ。父様のお顔は知らず、母様は知つてゐても、今では他人も同じ事。一人ほつちの身、早う殺して下され。お乳様がそのやうに可愛がつて下される程、どうやら心がうろたへて來ました。奥へ入つて下され。もうお顔を見せて下されるな」と伏沈む。母は咳上げ、「あの子の命はお乳が貰ひました。助けて下され侍衆」と、聲をあけて泣入る。

家老本田が奥から走り出で、「様子は具さに承つた。盗み物も出たし、殊に道中他領の者。これしきの事評議に及ばぬ。放免ちや立歸れ」。三吉「面恥かいて生きてはゐられませぬ。殺して下され」。本田は聲鋭く、「エ、小癩者。輕い科を成敗(斬棄て)とは掟に無い事。立去れ」。三吉「どうでも殺して下さらぬか」と起上り、「こりや八藏め、汝は己を土足にかけて面に疵を附けたな。元來己は侍の子ぢや。武士は名を惜しむ。覺えたか」と、傍に居る中間の脇差ひらりと抜取り光芒一閃、八藏の首は前へこりりと落ちた。大勢「すは人殺し」と、三吉を縛り上げる。母は泣惑うて奥に入る。三吉は母の後影を見送つた後「恥しめられて生きては居ぬ。一人死のより人斬れば往きかけの駄賃ぢや。父様・母様には來世でゆるりと逢ひませう」とて、わるびれた氣色もなく捕手に引かれて去る。其の後本陣は閑として火の用心の聲ばかり、夜色沈々と更け渡る。

與作は三吉が挿へられたとの取沙汰を聞き、其の罪を我が身に引受けようと覺悟して駈附けた。其の時は既に三吉が縛り去られた後で、人影も見えず深閑としてゐる。小萬は與作の來るを待ちかねて格子を叩けば、與作走り寄り、「どうぢや〜、仕損じたけななう」。小萬「仕損じたどころか。私や爰から覗いて見てゐました。三吉が八藏まで殺したは皆私等が身代り。可愛さうに明日の日に斬られるけな」と、泣いて囁く。與作「ア、南無阿彌陀々々、そりや皆此方が殺すわ。ただ手を下さぬばかりぢや。我等は何といふ業深い身であらう」。小萬「三吉よりも片時も早う死にたうござんすが、此方様どう思つてぞ」。與作「ム、其方が其の覺悟なら落著いた、満足した。宵から死んでのけうかとも思つたが、其方には親仁の難儀があるから、さうもなるまいと案じてゐた。心懸りは残らぬの」。小萬「かう運悪うては父様の事もどうで埒が明きませぬ。もじや〜いふだけ氣が減入る。何にも話さないで早う爰が出たうござんす」。與作「オ、有難い。裏の樹に繫いだ馬も人手に渡しては、主たる人に相濟まぬ。死場へ牽いて行きたい。其方は其の竹格子を力任せに離して見や」。小萬「ア、これも小よしの淫奔で押せば離れます」。與作は其の間に馬を牽出し、「預けて置いた脇差はどうした」。小萬「私が腰に差いてゐまする」。與作「よし、それならこの馬の背を踏まへてそつと下りや。アラ危い怪我すな」と、今死ぬる身にも氣遣ふ心のあはれさよ。

かくて兩人は足早に一丁ばかり立退いた。小萬「ヤア待つて下され。三吉の守袋には何神様の御札やら。私の懐にも大神宮様の御祓の御守がある。これを汚すは後生の障りになります。地藏堂(關の地藏院をいふ)に納めませう」。與作「オ、よう氣が附いた」と、小萬が三吉から預つた浮模様を織込んだ綾に紅梅裏を附けた守袋を取出すを、與作手に取つて中から御守を出し、月影にすかして讀めば、「正一位大原大神宮(丹波國桑田郡にある大原社「祭神は伊弉諾・伊弉册・天照大神」)、丹波の國の住人伊達の與作が一子與之介息災延命」とある。「さては三つで別れた我が子與之介であつたか。道理で彼が與作といふ名を常に慕うた」と、驚きの餘りどつかと坐り、千萬無量の感慨に打たれる。小萬「私等は何といふ業晒しの因果人でありませう。早う死んで罪が遁れたうござんす」。與作「オ、さうぢや」と、立たうとすれど腰抜けて足立たず。「口惜しや腰が抜けた」。小萬「エ、氣の弱い」と、引立

梗概

〔與作小萬夢路の駒〕 小萬は與作を馬に乗せて手綱を操り、死場を求めて關から伊勢路へ落ちて行く。彼の女は十二歳で出女となつてから、二十一歳の今に至るまでの思ひ出や、又與作とは一昨々年から情交を結んだ事などを述懐して、悲歎にくれる。迎る道も夢の心地して椋本（伊勢國河養郡椋本村）を過ぎ、柳田・安濃の松原・雲津・窪田は彼方ぞと思ふ折から、高田の寺（伊勢國河養郡一）の鐘を聞いて哀れを催し、國府（伊勢國鈴鹿郡内）の阿彌陀を遙拜し、豐國野の千貫松（伊勢國河養郡高野尾の東、錢掛松をいふ）の許に著いた。

二人は此處に足を止めて、與作は我が子與之介の事を語つて悲しみ、小萬は親横田の彦兵衛の事を語つて歎いた。折から飛脚が汗水流して來り、「お乳の人の御立願で、命乞の太々神樂が行はれる。明日四つ（午前十時）までに御願が叶へば、御祝儀に褒美が貰へる」と、語りながら急ぎ行く。與作は野中に隠れて之を聞き、「何方のお乳の人か。命乞ひの御願とは、嚙養君の煩ひの爲であらう。爰に入らぬ命が二つある。代られるものなら代つて遣りたい」。小萬「さればいの、代られる事なら餘所の子よりも、あの三吉が斬られて死ぬる身代りとなつて遣りたい」とて泣く。

時に人足四五十人ひそめて來り、「ヤア此處に馬ばかり繋いであるは不思議ぢや。提灯出せ」と呼ばれば、各隠し持つたる提灯の黒布を外して四邊を照す。大勢「馬が此處にあるから遠くへは行くまい。この邊の野を捜せ。與作・小萬」と、口々に呼ばはつて尋ね廻る。與作は見出されては二度の恥と思ひ、自害しようとして刀をひらりと抜く。大勢は其の刀の光を見附けて尋ね寄り、隠れてゐる二人を引分ける。與作「やれ侍なら情を知れ。我も元は武士であつた、伊達の與作が成れの果ぢや。とても生きてゐられぬ命を、死損ふのか残念な」ともがく。

この時遙か彼方に立てられた乗物から、御意を受けた若侍が馳せ來り、「これ與作久し振ぢや。覺えて居るだらう、故傍輩の句坂左内ぢや。今度姫君様が關東へ御下りでお悦びの時節、今夜の事を聞召されて憐れみをかけさせられ、吟味を仰せ附けられた。所で小萬の箱から貴殿の實名が顯はれ、三吉も貴方の實子に紛ひなく、殊にお乳の歎きを察せられて、三吉の命を助けら

れ、滋野井殿もお供して、忝くもあれまで御乗物をお出しになつた。貴殿には大殿の御前が相濟むまで五十人扶持を下され、小萬も御家へ引取れとの御意である。有難く承つて御乗物のお供をして歸られよ。與作地に平伏し、「却すも不忠の我が、三吉を罪に陥れ、恥辱の骸を曝すべき所を、姫君様が御あはれみを掛けさせられた御恩は、生々世々忘却仕りませぬ。妻も子も人の笑はぬ志を立てましたに、拙者はかりは何とも面目がござらぬ。どうぞお見棄て下され。今生のお暇乞を申す。小萬の事は宜しくお頼み致す。小萬「いや私も生きてはるられませぬ」と、刀に取附き與作と共に死なうとする。左内飛入つて脇差をもぎ取り、兩人を踏倒してはつたと睨み、「ヤイ人非人め、昔は番頭ともあつた者が、落ちぶれるにつれて正眞の馬方になりをつたな。死なうくとかやかしい。恥を知つた侍といふのは、我が身の恥を捨てて忠節を勵み、事あらば君の馬前に討死する者をいふのぢや。それ程關の小萬と心中したくば、左内は止めぬ。但し刃で死なすは物體ない。舌を食切るか、首縊るかした方がよいわい」とて大欠する。與作わつと泣き出し、「過りました左内殿。この身になつては分別も出ませぬ。萬事貴殿にお任せ申す」と手を合はせる。左内「合點したか。それでこそ與作ぢや。御前は拙者が取計らふ」とて、大聲上げ、「與作は御意を重じ生害思ひ止りました。御披露下され腰元衆」と呼ばはつた。

かくて與作・滋野井・與之介・小萬は乗物の前に手を突き、「何事も姫君様のお慈悲」と、頭を地に附けて嬉し涙に咽ぶ。調の姫は輿の内から、「與作丹波の伊達男と歌に歌ふは彼の人の事か。關の小萬も草紙の繪で見たよりは好い女ぢや。聞けば踊が上手ぢやけな。明日は一日逗留しよう。踊を踊つて見せても。家老どもに言付けてお扶持をたんと遣らう」と、幼少より自から人の上たる徳の備はつたお言葉に感激して皆々勇み立ち、踊子寄せて、踊浴衣の上から下まで色めき賑はつた。

〔與作踊〕 踊子數多集つて音頭唄を歌つて踊り、仁慈の世を祝ふ芳しい寮圍氣が満ちわたる。

音頭唄は近松作の「重井筒」の梗概を歌謡に仕組んだものである。

〔重井筒の梗概〕 船屋の入簀徳兵衛は、實兄の經營する重井筒屋の抱妓お房と馴染み、お房の難儀を救ふ金の工面に窮して、妻お辰の印判丹波與作待夜のこむろぶし

を捺し、家屋敷を抵當に入れて銀を借りた。その後彼はお辰の貞實な心に感じて、其の銀をお辰に渡し、お房の事を思ひ切った。そして己が放埒を苦にせる舅へ託言に行く爲家を出たが、途中で又お房の事を思ひ出して重井筒屋へ走った。兄夫婦は徳兵衛をお房に逢はせぬやうにした。お房はこれを知つて夜半に徳兵衛の居る室に忍び入り、遂に相共に家を抜け出で、高津の大佛殿勸進所で情死した。